

『古今集』夏の部から冬の部までの構造

——左右対称の対応関係という観点からの分析——

平 沢 竜 介

先ず、『古今集』夏の部の冒頭六首を示してみよう。^{註1}

題しらず

読人しらず

135わが屋戸の池の藤波咲きにけり山郭公いつか来鳴かむ

この歌、ある人のいはく、柿本人麿がなり

卯月に咲ける桜を見てよめる 紀利貞

136あはれてふ言をあまたにやらじとや春におくれてひとり

咲くらむ

題しらず

読人しらず

137五月まつ山郭公うちはぶき今も鳴かなむ去年のふるこゑ

伊勢

138五月来ば鳴きもふりなむ郭公まだしきほどの声を聞かば

や 読人しらず

139五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

140いつのまに五月来ぬらむあしひきの山郭公今ぞ鳴くなる

141けさ来鳴きいまだ旅なる郭公花橘に宿はからなむ

135が春の部下に収められた

弥生に鶯の声の久しう聞こえざりけるをよめる

つらゆき

128鳴きとむる花しなれば鶯もはては物憂くなりぬべらなり

という歌と対応関係を持つことは既に指摘した。^{註2}

また、135と141は、「宿」「郭公」の語を共有するとともに、135が「藤波」、141が「花橘」といずれも花を詠じ、かつ135が我が宿の藤の花が咲いたのを見て山郭公がいつ来て鳴いてくれるのかと詠ずるのに対し、141は今朝やつて来て鳴いた郭公がわが家の橘で宿を取つてほしいと対照的な内容を詠じて対をなす。136は「卯月に咲ける桜を見てよめる」という詞書が示すように、四月という季節外れの時期に咲く桜を詠ずるのに対し、140は五月が来たことを知らせる郭公を詠じて対応し、137と139は初句に「五月まつ」という表現を共有して対をなす。135から141までの歌群は、138を中心に左右対称の構成を形成するのであり、その対応関係を図示すると図1となる。

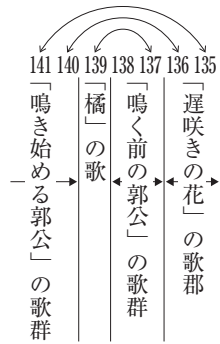


図 1

続く、141から149までの歌群を示すと次のようになる。

(題しらず)

141 けさ来鳴きいまだ旅なる郭公花橘に宿はからなむ

音羽山を越えける時に郭公の鳴くを聞きてよめる

紀友則

142 音羽山けさこえくれば郭公こずゑはるかに今ぞ鳴くなる

郭公のはじめて鳴きけるを聞きてよめる

そせい

143 郭公はつこゑ聞けばあぢきなく主さだまらぬ恋せらるは
た

奈良の石上寺にて郭公の鳴くをよめる

144 いそのかみふるき都の時鳥声ばかりこそ昔なりけれ

題しらず

読人しらず

145 夏山に鳴く郭公心あらば物思ふ我に声な聞かせそ

146 郭公鳴く声きけば別れにし故里さへぞ恋しかりける

147 時鳥汝が鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふもの
から

148 思ひいづるときはの山の時鳥韓紅のふりいでぞ鳴く

149 声はして涙は見えぬ郭公わが衣手のひつをからなむ

141は「郭公花橘に宿はからなむ」、149は「郭公わが衣手のひつをからなむ」と、ともに類似した表現を用いて対応し、142が「音羽山」に鳴く郭公を詠ずるのに対応し、148は「ときはの山」に鳴く郭公を詠じて対をなす。143は郭公の鳴く声を聞くと誰と

言うこともなく恋しい気持ちになると詠じ、147は郭公が多くの場合で鳴くという浮気な性格を持っていることに不快感を示すというように、いずれも郭公の声を聞いて惹起される感情を表現して対をなし、144が「いそのかみふるき都」で昔と変わることなく鳴く郭公を詠ずるのに対応し、146は郭公の声を聞くと故里が恋しく思い出されると、いずれも故里に関係する郭公を詠じて対をなす。また、143は「郭公はつこゑ聞けば」、146は「郭公鳴く声きけば」と詠じて対応し、144は「ふるき都」で鳴く郭公、147は「あまたの里」で鳴く郭公を詠じて対をなす。141から149までの歌群は、143と146の対と144と147の対が交差して対応しつつ、145を中心と同心円状に左右対称の対応関係を構成する。その対応関係を図示すると図2となる。

次に149から164までの歌群を引用する。

(題しらず)

(読人しらず)

149 声はして涙は見えぬ郭公わが衣手のひつをからなむ

150 あしひきの山郭公をりはへて誰かまさると音をのみぞ鳴く

151 いまさらに山へ帰るな時鳥声の限りはわが屋戸になけ

三国町

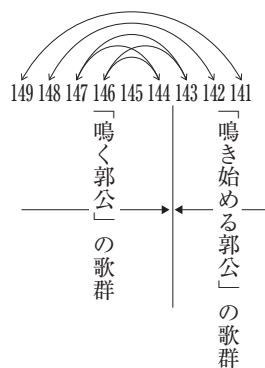


図 2

- 152 やよや待て山郭公ことつてむ我世の中にすみわびぬとよ
寛平御時後の宮の歌合の歌 紀友則
- 153 五月雨に物思ひをれば時鳥夜深く鳴きていづち行くらむ
154 夜や暗き道やまどへる時鳥わが宿をしも過ぎかてに鳴く
大江千里
- 155 やどりせし花橋もかれなくになど郭公声たえぬらむ
つらゆき
- 156 夏の夜の臥すかとすれば郭公鳴くひと声にあくるしののめ
壬生忠岑
- 157 暮るるかと思れば明けぬる夏の夜をあかずとや鳴く山郭公
紀秋岑
- 158 夏山に恋しき人やいりにけむ声ふりたててなく郭公
題しらず 読人しらず

159 去年の夏鳴きふるしてし時鳥それかあらぬか声のかはらぬ

郭公の鳴くを聞きてよめる つらゆき

160 五月雨の空もとどろに郭公なにを憂しとか夜ただなくらむ

さぶらひにて、をのこどもの酒たうべけるに、召して、「郭公待つ歌よめ」とありければ、よめる

みつね

161 郭公声もきこえず山彦は外に鳴く音をこたへやはせぬ
山に郭公の鳴きけるを聞きてよめる

つらゆき

162 時鳥人待つ山に鳴くなれば我うちつけに恋ひまさりけり
はやく住みける所にて、郭公の鳴きけるを聞きてよめる

め

ただみね

163 昔へや今も恋しき郭公故里にしも鳴きて来つらむ
郭公の鳴きけるを聞きてよめる

みつね

164 ほととぎす我とはなしに卯の花の憂き世の中になきわたるらむ

149と164はいずれも歌の詠み手が泣いている際に郭公の鳴き声を聞いて詠じた歌という点で共通し、150と162はともに山で鳴く郭公を詠じると同時に、150が「誰かまさると」、162が「恋ひまさりけり」といずれも「まさる」の語を詠み込んで共通する。151は自分の家で鳴いている郭公に山に帰らないよう命ずるのに対

し、163は山からやって来て故里で鳴いている郭公を詠じて対応し、152は「ややや待て山郭公ことつてむ」と郭公を擬人化するのに対し、161も「山彦は外に鳴く音をこたへやはせぬ」と山彦を擬人化して対応する。153と160はいずれも五月雨の夜に鳴く郭公を詠じて対をなし、154と159は、154の「夜や暗き道やまどへる」という表現と159の「それかあらぬか」という表現が対をなして対応し、155は郭公の声が絶えたと詠ずるのに対し、158は「声ふりたててなく郭公」と詠じ、かつ155の「など郭公声たえぬらむ」と158の「夏山に恋しき人やいりにけむ」という表現が、ともに現在眼の当たりになっている状況の原因、理由を推測して対をなす。と同時に154と158は154が「夜や暗き道やまどへる時鳥」、158は「夏山に恋しき人やいりにけむ」といずれも郭公を擬人化し、郭公が鳴くことの理由を推測する点で共通し、155は今年はわが家に来ない郭公を詠ずるのに対し、159は昨年同様になが家で鳴く郭公を詠じて対応する。156と157はともに夏の短い夜の明け方に鳴く郭公を詠じて対をなす。149から164までの歌群は、154と159の対と155と158の対が156と157の対を中心に向心円状に対応すると同時に、154と158の対と155と157の対が交差して対応するという対応関係を形成し、さらに150と162の対と151と163の対も交差して対応するという形で、156と157の対を中心に左右対称の対応関係を形成する。149から164までの対応関係を図示すると、

図3となる。

164から夏の部の最終歌168までの歌群を示すと、以下の通りである。

(郭公の鳴きけるを聞きてよめる) (みつね)

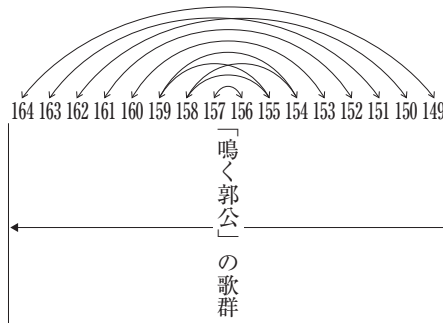


図3

164ほととぎす我とはなしに卯の花の憂き世の中になきわたるらむ

蓮の露を見てよめる

僧正遍照

165蓮葉の濁りにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

月のおもしろかりける夜、あかつきがたによめる

ふかやぶ

166夏の夜はまだよひながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ

隣より、常夏の花をこひにおこせたりければ、惜し

みてこの歌をよみてつかはしける

みつね

167塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝るとこ夏の花

六月のつごもりの日よめる

くらむ

164、166、168は、いずれも歌の末尾に「らむ」という原因推量の助動詞を用いている点で三首が相互に対応する。165が蓮の葉に置く露を見て、濁りに染まらないと言われる蓮の葉であるのに、どうして露を玉と見せて人を欺くのかと詠ずるのに対し、

167は隣の家から常夏の花を譲ってほしいと頼まれた際、常夏の代わりに詠んで贈った歌という詞書を持ち、愛しい妻とともに寝る床という名を持つ常夏なので、塵一つさえ置かせたくないほど大切にしていると詠じ、いずれも機知に富んだ趣向を凝らして蓮や常夏という植物を詠じている点で共通する。164から168

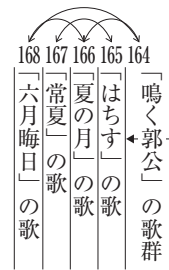


図 4

までの歌群は、図 4 に示すように166を中心に左右対称の構成をなす。

『古今集』夏の部は、巻頭歌135から141までの歌群、141から149までの歌群、149から164の歌群、164から夏の部の巻頭歌168までの歌群という、いずれも左右対称の構造を持つ四つの歌群が連続して配置され、左右対称の対応関係によって『古今集』の巻頭歌1から夏の部の巻頭歌135まで連続して対応してきた対応関係は、135から141、141から149、149から164、164から168と継続して、夏の部の巻頭歌168まで到達することになる。

*

『古今集』秋の部上の左右対称の対応関係を考察してみよう。夏の部の巻頭歌168とそれに続く秋の部上の巻頭歌169から188までの歌群を示すと以下のようなようになる。

六月つごもりの日よめる

168 夏と秋の行きかふ空のかよひちはかたへすずしき風や吹くらむ

秋立つ日よめる

藤原敏行朝臣

169 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかぬ

秋立つ日、うへのをのこども、賀茂の河原に川道遥しける、ともにまかりてよめる

つらゆき

170 川風の涼しくもあるか打ちよする波とともにや秋は立つらむ

題しらず

読人しらず

171 わがせこが衣のすそを吹き返しうらめづらしき秋のはつ風

172 昨日こそ早苗取りしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く

173 秋風の吹きにし日より久方の天の河原にたためぬ日はなし

174 久方の天の河原のわたしもり君渡りなば楫かくしてよ

175 漢河紅葉を橋にわたせばやたなばたつめの秋をしも待つ

176 恋ひ恋ひて逢ふ夜は今夜天の河霧立ちわたりあけずもあらなむ

寛平御時、なぬかの夜、「うへにさぶらふをのことも、歌奉れ」とおほせられる時に、人にかはりてよめる

よめる

ものり

177 天の河浅瀬しらなみたどりつつ渡りはてねば明けぞしに

ける

同じ御時、後の宮の歌合の歌 藤原興風

178 契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたび逢ふは逢ふかは

七日の夜の夜よめる

みつね

179 年ごとに逢ふとはすれど織女の寝る夜のかずぞすくなかりける

180 織女にかしつる糸のうちはへて年の緒長く恋ひやわたらむ

題しらず

素性

181 今夜こむ人には逢はじ織女のひさしきほどに待ちもこそすれ

七日の夜の暁によめる

源宗于朝臣

182 今はとて別るときは天の河わたらぬさきに袖ぞひちぬる

八日の日よめる

壬生忠岑

183 今日よりは今こむ年の昨日をぞいつしかとのみ待ちわたるべき

題しらず

読人しらず

184 木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり

185 おほかたの秋くるからにわが身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ

186 わがためにくる秋にしもあらなくに虫の音聞けばまづぞ悲しき

187 物ごとに秋ぞ悲しきもみぢつつ移ろひゆくを限りと思へば

188 独り寝る床は草葉にあらねども秋くるよひはつゆけかりけり

168は夏の部の最終歌であるが、168が「夏と秋の行きかふ空のかよひぢ」の片側、すなわち秋がやって来る側は「すずしき風や吹くらむ」と推測し、秋が涼しい風とともにやって来ると詠ずるのに対し、169は「風の音」で秋の到来を知り、170は涼しい川風とともに秋は来るのだろうかと推量する。さらに171は「秋のはつ風」、172は「稲葉そよぎて秋風の吹く」、173は「秋風の吹きにし日より」といづれも秋風を詠ずるといように、168から173までの六首は、いづれも秋風を詠み込むことで、秋の到来を詠じて共通する。因って、168から173までの歌群は、歌群の中のそれぞれが歌群内の他の全ての歌と対応するという関係を持つ。

173から183までは七夕を詠じた歌群である。173が「秋風の吹きにし日より」「たたぬ日はなし」と詠ずるのに対し、183は「今日よりは今こむ年の昨日をぞ」と詠じ、いづれも「日」という語を詠み込んで対応し、174が「天の河原のわたしもり君渡りなば」、182が「天の河わたらぬさきに袖ぞひちぬる」といづれも天の川を渡る牽牛の姿を詠じて対をなす。175は「たなばたつめの秋をしも待つ」、181は「織女のひさしきほどに待ちもこそすれ」と織女が待つことを詠じて共通し、176は「恋ひ恋ひて逢ふ夜は今夜」、179は「年ごとに逢ふとはすれど」と、ともに牽牛と織女の逢瀬を詠じて対をなす。177が「天の河浅瀬」という序

詞を用いるのに対し、180は「織女にかしつる糸の」という序詞を用いて共通する。173から183までの七夕の歌群は、176と179、177と180がたすき掛けに対応した形で178を中心に左右対称の対応関係を形成する。

183は織女の立場に立って、牽牛と別れた後の心情を詠じたもので、秋の悲哀を感じさせる。184から188は、184が「心づくしの秋は来にけり」、185が「秋くるからにわが身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ」、186が「わがためにくる秋にしもあらなくに虫の音聞けばまづぞ悲しき」、187が「物ごとに秋ぞ悲しき」、188が「秋くるよひはつゆけかりけり」と、いづれも秋の悲哀を詠じて共通する。183から188までの六首の歌群は、168から173までの歌群同様、歌群内のそれぞれの歌が歌群内の他の全ての歌と対応するという関係を構築する。

以上述べてきた、168から188までの歌群の対応関係を図示すると図5となり、168から188までの歌群は、178を中心に左右対称の対応関係を構築することになる。

次に右に示した最初の左右対称の歌群に続く左右対称の対応関係を構成する歌群を示してみよう。最初の左右対称の歌群が188で終わっていたことから、続く左右対称の歌群は188から始まることになる。

(題しらす)

188 独り寝る床は草葉にあらねども秋くるよひはつゆけかりけり

是貞の親王の家の歌合の歌

189 いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふことの限りなり

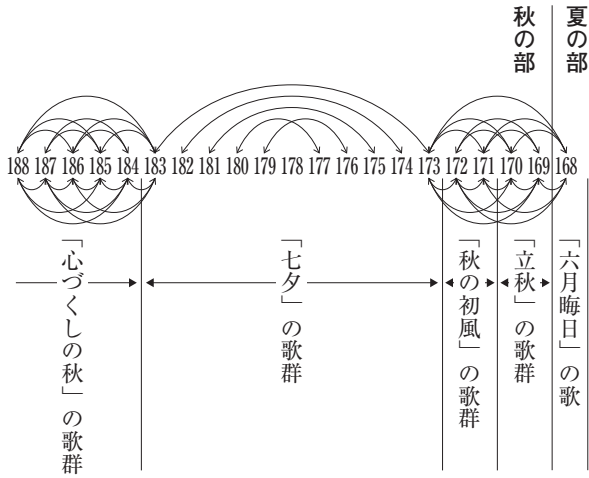


図5

- ける
かんなりの壺に人々あつまりて、秋の夜惜しむ歌よ
みけるついでによめる
みつね
190 かくばかりをしと思ふ夜をいたづらに寝てあかすらむ人
さへぞ憂き
題しらず
読人しらず
- 191 白雲に羽うちかはし飛ぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月
192 さ夜中と夜はふけぬらし雁が音のきこゆる空に月わたる
見ゆ
是貞の親王の家の歌合によめる
大江千里
- 193 月見ればちぢに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあ
らねど
ただみね
- 194 久方の月の桂も秋はなほみぢすればや照りまさるらむ
月をよめる
在原元方
- 195 秋の夜の月の光し明ければくらぶの山も越えぬべらなり
人のもとにまかれりける夜、きりぎりすの鳴きける
を聞きてよめる
藤原忠房
- 196 きりぎりすいたくな鳴きぞ秋の夜の長き思ひは我ぞまさ
れる
是貞の親王の家の歌合の歌
としゆきの朝臣
- 197 秋の夜のあるも知らず鳴く虫はわがごとのや悲しか
るらむ
題しらず
読人しらず
- 198 秋萩も色づきぬればきりぎりすわが寝ぬごとや夜はかな

しき

188から198までの歌群は、188が「独り寝る」、198が「わが寝ぬごとや」と「寝」という動詞を共有し、189と197はいずれも「是貞の親王の家の歌合の歌」であり、秋の夜の悲哀を詠じて対応する。190は詞書に「かんなりの壺に人々あつまりて、秋の夜惜しむ歌よみけるついでによめる」、196は詞書に「人のもとにまかれりける夜、きりぎりすの鳴きけるを聞きてよめる」とあり、どちらも他の人とともに秋の夜を過ごす時に詠まれた歌という点で共通する。191と195はともに「秋の夜の月」の光が明るいのので「雁のかず」や「くらぶの山」の様子もはっきり見えると詠じて対応し、192が「さ夜中と夜はふけぬらし」と推量するのに対し、194は秋の月の明るさを「もみぢすればや照りまさるらむ」と推量して対をなす。188から198までの歌群は、193を中心にして左右対称の構成をなす。この対応関係を図示すると図6となる。

続いて198から220までの歌群を示してみよう。

題しらず

読人しらず

198 秋萩も色づきぬればきりぎりすわが寝ぬごとや夜はかなしき

199 秋の夜は露こそことに寒からし草むらごことに虫のわぶれば

200 君しのぶ草にやつるる故里は松虫の音ぞ悲しかりける

201 秋の野に道も迷ひぬ松虫の声する方に宿やからまし

202 秋の野に人まつ虫の声すなり我かとゆきていざとぶらはむ

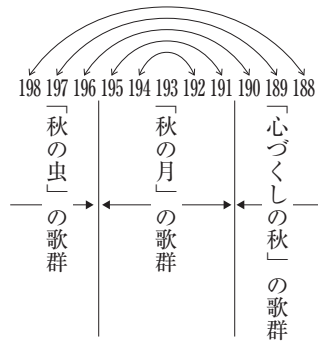


図6

203 もみぢ葉の散りてつもれるわがやどにたれをまつ虫こら鳴くらむ

204 ひぐらしの鳴きつるなへに日は暮れぬと思へば山の蔭にぞありける

205 ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは風よりほかにとふ人もなし

初雁よめる

在原元方

206 待つ人にあらぬものから初雁のけさ鳴く声のめずらしきかな

かな

是貞の親王の家の歌合の歌

とものり

207 秋風にはつかりがねぞ聞ゆなる誰が玉梓をかけて来つらむ

む

題しらず

読人しらず

208 わが門に稲負鳥の鳴くなへにけさ吹く風に雁は来にけり
209 いとはやも鳴きぬる雁か白露の色どる木々ももみぢあへ
なくに

210 春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴くなる秋霧のうへ
に

211 夜を寒み衣かりがね鳴くなへに萩の下葉もうつろひにけ
り

この歌はある人のいはく、柿本人麿がなりと

寛平御時後の宮の歌合の歌

藤原菅根朝臣

212 秋風に声をほにあげてくる舟は天の門わたる雁にぞあり
ける

雁の鳴きけるを聞きてよめる

みつね

213 憂きことを思いつらねてかりがねの鳴きこそ渡れ秋の夜
な夜な

是貞の親王の家の歌合の歌

ただみね

214 山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目をさまし
つつ

読人しらず

215 奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋は悲しき
題しらず

216 秋萩にうらびれをればあしひきの山下とよみ鹿の鳴くら
む

217 秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の目には見えず音のさや

けさ

是貞の親王の家の歌合による

藤原敏行朝臣

218 秋萩の花咲きにけり高砂の尾上の鹿は今や鳴くらむ
昔あひ知りて侍りける人の、秋の野にあひて、物語
しけるついでによめる

みつね

219 秋萩の古枝に咲ける花見ればもとの心は忘れざりけり
題しらず

読人しらず

220 秋萩の下葉色づく今よりやひとりある人の寝ねがてにす
る

221 鳴き渡る雁の涙やおちつらむ物思ふやどの萩のうへの露

198 から221までの歌群を見ると、198は「わが寝ぬごとや」、220は
「ひとりある人の寝ねがてにする」といずれも秋の夜に人が眠
れない様を詠じて共通し、199と221はともに「露」を詠み込み、

199が露が寒いので虫がわびしがっているのに対し、221は
雁の涙が露となったといずれも虫や雁の辛い状況における
「露」を詠じて対応する。

200から203までの歌群はいずれも「松虫」を詠じて共通し、200
と203は忍ぶ草が生えたり紅葉が散り敷いていたりする場所に松
虫が鳴くと詠じて対応し、201と202はいずれも秋の野に鳴く松虫
の声を聞いて松虫の鳴く方に訪ねて行こうと詠じて対をなす。

200から203のまでの歌群は、201と202、200と203が対応し、201と202の
対を中心に左右対称の構造を形成する。

204、205はいずれも「蛸」の鳴く音を詠ずるが、この二首は
「鹿」の声を詠ずる214、215の二首と対応する。204が「山の蔭」

を詠み込むのに対し、215は「奥山」を詠じて対応し、205と214は

ともに「山里」の語を詠じて対をなす。

この204と215、205と214の対応関係に挟まれる206から213までの歌群は、いずれも「雁」を詠じて「雁」の歌群を形成する。「雁」の歌群の冒頭歌206は雁の声を初めて聞いて「けさ鳴く声のめずらしきかな」と新鮮な感動を詠ずるのに対し、最終歌213は雁の鳴き声を夜ごとに聞いて「憂きことを思いつらねて」「泣きこそ渡れ秋の夜な夜な」と、206とは対照的な辛い心境を詠じて対応し、207と212は「秋風」とともにやって来る雁を詠じて対をなす。208と211は「鳴くなへに」という表現を共有し、209が「いはやも鳴きぬる雁か」と詠ずるのに対し、210は「かりがねは今ぞ鳴くなる」といずれも雁の到来を詠じて対応する。206から213までの歌群は、209、210の対を中心に左右対称の対応関係を構築する。

先に、214と205、215と204が対応することを指摘したが、だとすると、204から215までは、209、210の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成すると見ることができよう。

216から219まではいずれも「秋萩」を詠じた歌が続くが、216は「秋萩にうらびれをれば」219は「秋萩の古枝に咲ける花見れば」と、どちらも順接確定条件の構文を用いて共通し、217、218は二首ともに「鹿の鳴く声」を詠み込んで対をなす。

220が198と対応し、221が199と対応することは既に述べた。198から221までの歌群の対応関係を図示すると、図7のような対応関係を示すことになるが、このような対応関係は、209、210の対を中心に左右対称の対応関係を形成していると見ることができよう。

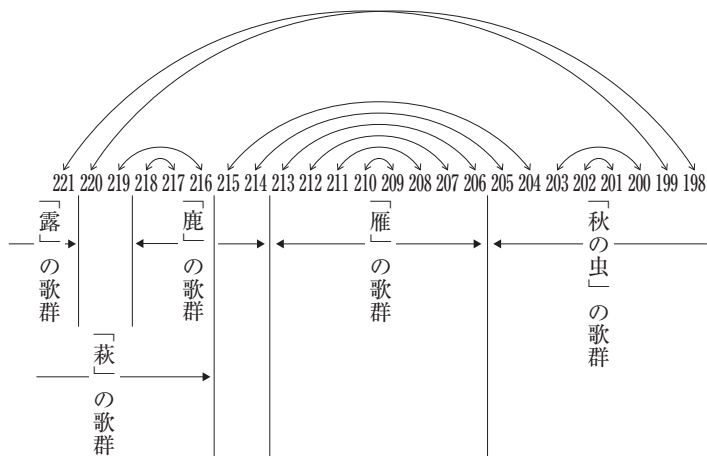


図7

次に220から237までの歌群を示してみよう。

題しらず

読しらず

題しらず

小野美材

220 秋萩の下葉色づく今よりやひとりある人の寝ねがてにす
る

229 女郎花おほかる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立
ちなむ

朱雀院の女郎花合によみて奉りける

221 鳴き渡る雁の涙やおちつらむ物思ふやどの萩のうへの露

左のおほいまうちぎみ

222 萩の露玉にぬかむととれば消ぬよし見む人は枝ながら見
よ

230 女郎花秋の野風にうちながびき心ひとつを誰によすらむ

藤原定方朝臣

223 折りて見ば落ちぞしぬべき秋萩の枝もたわわに置ける白
露

231 秋ならで逢ふことかたき女郎花天の河原に生ひぬものゆ
ゑ

つらゆき

224 萩が花散るらむ小野の露霜にぬれてをゆかむさ夜はふく
とも

232 誰が秋にあらぬものゆゑ女郎花なぞ色にいでてまだき移
ろふ

みつね

是貞の親王の家の歌合によめる 文屋朝康

233 妻恋ふる鹿ぞ鳴くなる女郎花おのがすむ野の花と知らず
や

ち

題しらず

僧正遍照

234 女郎花吹きすぎてくる秋風は目には見えねど香こそしる
けれ

るな

ただみね

僧正遍照がもとに、奈良へまかりける時に、男山に
て女郎花を見てよめる 布留今道

235 人の見ることやくるしき女郎花秋霧にのみたちかくるら
む

ば

227 女郎花憂しと見つつぞ行きすぐる男山にし立てりと思へ
ば

236 ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむ屋戸に植えて
見ましを

是貞の親王の家の歌合の歌 としゆきの朝臣

ものへまかりけるに、人の家に女郎花植ゑたりける

228 秋の野に宿りはすべし女郎花名をむつましみ旅ならなく
に

を見てよめる

兼覽王

227 女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたるやどにひとり

237 女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたるやどにひとり

立てれば

220と237は「ひとり」語を共有し、221と236は「宿」の語を共有して対応する。222は「よし見む人は」、235は「人の見ることやくるしき」といずれも人が見る様を詠じ、222は萩の枝の置いた露を玉に抜くことができないと詠じ、235は女郎花が霧に隠れて見ることができないと、ともに不可能なことを詠じて対をなし、223が萩の枝にたわわに置いている白露を詠ずるのに対し、234は秋風に運ばれてくる女郎花の強い香りを詠じて対をなす。224は萩の花が咲く野、233は女郎花の咲く野を詠じて対をなし、225の第二句の終わりにある「なれや」という表現と、232の第二句の終わりにある「ものゆゑ」という表現が類似して対応する。また、220が「秋萩の下葉」、221が「萩のうへの露」を詠じて対をなし、236と237は「ひとり」「宿」の語を共有して対応する。さらに、222と223はともに萩の枝に置いた露を詠じて対をなし、234と235は見ることでできない秋風や女郎花を詠じて対応する。226は229と「名」の語を共有して対応し、227はと230は女郎花を擬人化して詠じている点で照応し、228と231はいずれも女郎花という名から女性を連想し、秋にしか逢うことのできぬ女郎花を賞美しようとする様を詠じて共通する。また、228と229はいずれも野に宿りをする様を詠じ、「名」の語を共有して対応する。220から237までの歌群は図8示すように、228と229の対を中心に左右対称の対応関係を形成する。

227から秋上の巻の巻軸歌248までを示すと以下のようになる。

ものへまかりけるに、人の家に女郎花植ゑたりける
を見てよめる

兼覧王

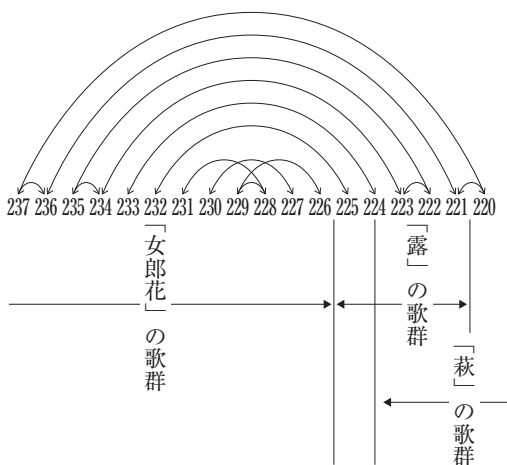


図8

237 女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたるやどにひとり
立てれば

寛平御時、蔵人所のをのこども、嵯峨野に花見むと
てまかりける時、帰るとてみな歌よみけるついでに
よめる

238 花にあかでなに帰るらむ女郎花おほかる野辺に寝なまし
ものを

是貞の親王の家の歌合によめる としゆきの朝臣

239 何人来てぬぎかけし藤袴来る秋ごとに野辺にほはす

藤袴をよみて人につかはしける つらゆき

240 やどりせし人の形見か藤袴わすれがたき香にほひつ
つ

藤袴をよめる そせい

241 主知らぬ香こそほへれ秋の野に誰がぬぎかけし藤袴ぞ
も

題しらず 平貞文

242 今よりは植ゑてだに見じ花すすき穂にいづる秋はわびし
かりけり

寛平御時後の宮の歌合の歌 在原棟梁

243 秋の野の草の袂か花すすき穂にいでて招く袖と見ゆらむ
素性法師

244 我のみやあはれと思はむきりぎりす鳴く夕かげの大和な
でしこ

題しらず 読人しらず

245 緑なるひとつ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける

246 ももくさの花の紐とく秋の野に思ひたはれむ人などがめ
そ

247 月草に衣は摺らむ朝露に濡れてのちはうつろひぬとも
仁和の帝、親王におはしましける時、布留の滝御覽
せむとておはしましける道に、遍照が母の家に宿り
給へりける時に、庭を秋の野につくりて、御物語の
ついでによみて奉りける 僧正遍照

248 里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野ら
なる

237は「荒れたるやど」、248は「里はあれて人はふりにし宿」と

詠じて対応し、238は野に咲く女郎花を見に来てこのまま野宿し

たいと詠ずるのに対応し、246はいろいろの草の花が咲く秋の野で

戯れようと詠じ、いずれも秋の野に咲く花を満喫したい意志を

示して共通する。239は藤袴の香りが野に満ちていると袴の香り

を想起させるのに対応し、247は月草で衣を染めようと衣の染色を

詠じて対をなす。240が「やどりせし人の形見か藤袴」と詠ずる

のに対し、245も「緑なるひとつ草とぞ春は見し」と詠じ、いず

れも過去の助動詞「き」の連体形「し」を用いて、過去に思い

を馳せている点で共通する。241と244はともに二句切れで、歌の

最終部に「藤袴」「大和なでしこ」という花が詠み込まれる形

を取って対応し、242と243はともに「花すすき」を詠じて共通す

る。と同時に、241は「藤袴」から「袴」を連想させるのに対し、

243は「すすき」を「袖」に見立てて対応し、242は「今よりは植

ゑてだに見じ」、244は「我のみやあはれと思はむ」といった意

志を示して対をなす。237から248までの歌群は、238と246、239と247、

241と243、242と244の四組の対が交差して対応しつつ、242と243の対を中心に左右対称の対応関係を形成する。237から248までの歌群の構造を図示すると、**図9**となる。

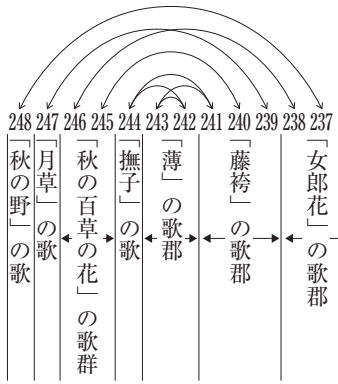


図9

『古今集』秋の部上は、夏の部の巻軸歌168から188までの歌群、188から198までの歌群、198から221までの歌群、220から237までの歌群、237から秋の部上の巻軸歌248までの歌群という五つの左右対称の対応関係を有する歌群で連続的に構成され、歌集の巻頭歌1から168まで連続してきた対応関係は、168から188、188から198、

198から220、220から237、237から秋の部上の巻軸歌248へと受け継がれる。

*

続いて『古今集』秋の部下の歌群の分析を試みる。まず、秋の部上の巻軸歌248と秋の部下の巻頭歌249から268までの歌群を示してみよう。

仁和の帝、親王におはしましける時、布留の滝御覽
 せむとておはしましける道に、遍照が母の家に宿り
 給へりける時に、庭を秋の野につくりて、御物語の
 ついでによみて奉りける 僧正遍照

248 里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

是貞の親王の家の歌合の歌 文室康秀

249 吹くからに秋の草木のしほるればむべ山風を嵐といふらむ

250 草も木も色かはれどもわたつうみの波の花にぞ秋なかりける

秋の歌合しける時によめる 紀淑望

251 紅葉せぬときはの山は吹く風の音にや秋を聞きわたるらむ

題しらず 読人しらず

252 霧たちて雁ぞ鳴くなる片岡の朝の原は紅葉しぬらむ

253 神無月時雨もいまだ降らなくなにかねてうつるふ神奈備の森

254 ちはやぶる神奈備山のもみぢ葉に思ひはかけじ移ろふもの

貞観御時、綾綺殿の前に梅の木ありけり。西の方にさせりける枝のもみぢはじめたりけるを、うへにさぶらふをのこどもよみけるついでによめる

藤原勝臣

255 おなじ枝をわきて木の葉のうつろふは西こそ秋の始めなりけれ

石山のまうでける時、音羽山の紅葉を見てよめる

つらゆき

256 秋風の吹きにし日より音羽山峰のこずゑも色づきにけり

是貞の親王の家の歌合によめる としゆきの朝臣

257 白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちちに染むらむ

壬生忠岑

258 秋の夜の露をば露と置きながら雁の涙や野辺を染むらむ

題しらず 読人しらず

259 秋の露色々ことに置けばこそ山の木の葉のちくさなるらめ

もる山のほとりにてよめる

260 白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

秋の歌とてよめる 在原元方

261 雨降れど露ももらじを笠取の山はいかでもみぢ染めけむ

神の杜のあたりをまかりける時に、斎垣のうちののみぢを見てよめる つらゆき

262 ちはやぶる神の斎垣にはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり

是貞の親王の家の歌合によめる ただみね

263 雨降れば笠取山のもみぢ葉はゆきかふ人の袖さへぞ照る

寛平御時後の宮の歌合の歌 読人しらず

264 散らねどもかねてぞ惜しきもみぢ葉は今は限りの色と見つれば

大和国にまかりける時、佐保山に霧の立てりけるを見てよめる 紀友則

265 誰がための錦なればか秋霧の佐保の山べを立ちかくすらむ

是貞の親王の家の歌合の歌 読人しらず

266 秋霧は今朝はなたちそ佐保山のははその紅葉よそにても見む

秋の歌とてよめる 坂上是則

267 佐保山のははその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな

人の前栽に菊に結びつけて植えける歌

268 植えし植えば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや 在原業平朝臣

248 は秋の部上の巻軸歌であるが、詞書によると光孝天皇が即位以前に遍照の母の家に宿を取った時、遍照が母の家の「庭を秋の野につく」って詠んだ歌とされ、268 は「人の前栽に菊に結びつけて植えける歌」という詞書を持つというように、いずれも

庭に植物を植えた時に詠まれた歌という点で共通する。249は嵐が草木をしおらせると詠ずるのに対し、266は秋霧が紅葉を隠すと詠じ、ともに擬人法を用いている点で共通し、250が草も木も色は変わるが、波の花には秋がない、つまり色が変わらないとするのに対し、267は佐保山の紅葉の色は薄く色づいただけだが、秋は深くなつたと、いずれも一首の中に対比的な事柄を詠じて対をなす。なお、249と250は「草木」、「秋」の語を共有して対応し、266、267はいずれも「佐保山のははそ」の紅葉を詠じて対応する。251が紅葉しない「ときはの山」では紅葉を見ることができない、265は「佐保山」の紅葉を秋霧が隠すので見ることができないと、いずれも山の紅葉を見ることができない様子を詠じて対をなす。252が「片岡の朝の原はもみぢしぬらむ」と紅葉し始めた様子を詠ずるのに対し、264は「もみぢ葉は今は限りの色と見つれば」と散る直前の紅葉を詠じて対応し、253が時雨も降らないうちに紅葉する神奈備の森を詠ずるのに対し、263は雨が降って紅葉する笠取山を詠じて対をなす。254と262はいずれも「ちはやぶる」「うつろふ」という語を用いて共通し、255と261はいずれも紅葉し始めた状態を詠じて対応する。256は「音羽山」、260は「もる山」といづれも山を詠み込み、かつ「色づきにけり」という表現を共有して対応し、257が白露が木の葉を千々に染めるとするのに対し、259は露が色々に置くので山の木の葉が千種に染まるのだらうと対照的な内容を詠じて対をなす。248から268までの歌群は、249と266の対と250と267の対が交差して対応し、258を中心左右対称の対応関係を構成する。その対応関係を図示すると、**図10**となる。

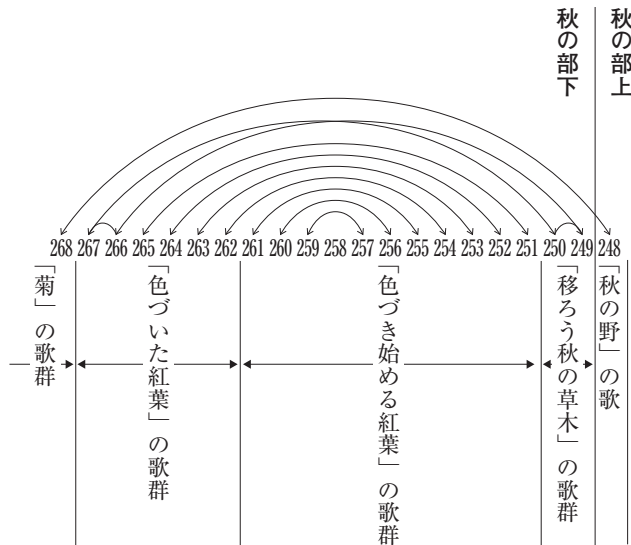


図 10

続いて268から280までの歌群を示してみよう。

人の前栽に菊に結びつけて植えける歌

在原業平朝臣

268 植えし植えば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ

枯れめや

寛平御時、菊の花をよませ給うける

敏行朝臣

269 久方の雲のうへにて見る菊は天つ星とぞあやまたれける

この歌は、まだ殿上ゆるされざりける時に、召し

あげられてつかうまつれるとなむ

是貞の親王の家の歌合の歌 紀友則

270 露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋のひさしかる

べく

寛平御時後の宮の歌合の歌 大江千里

271 植えしとき花まちどほにありし菊うつろふ秋にあはむと

や見し

同じ御時せられける菊合に、洲浜をつくりて、菊の

花植えたりけるにくはへたりける歌。吹上の浜の形

に菊植えたりけるによめる すがはらの朝臣

272 秋風の吹きあげにたてる白菊は花かあらぬか波の寄する

か

仙宮に菊をわけて人のいたれる形をよめる

素性法師

273 濡れてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我は経にけ

む

菊の花のもにて人の人待てる形をよめる

ともりのり

274 花見つつ人まつときは白妙の袖かとのみぞあやまたれけ

る

大沢の池の形に菊植えたるをよめる

275 ひとつもと思ひし菊を大沢の池の底にも誰か植えけむ

世の中のはかなきことを思ひけるをりに、菊の花を

見てよみける づらゆき

276 秋の菊にほふ限りはかざしてむ花よりさきと知らぬわが

身を

白菊の花をよめる 凡河内躬恒

277 心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花

是貞の親王の家の歌合の歌 読人しらず

278 色かはる秋の菊をば一年にふたたびにほふ花とこそ見れ

仁和寺に菊の花召しける時に、「歌そへて奉れ」と

おほせられければ、よみて奉りける平貞文

279 秋をおきて時こそありけれ菊の花移ろふからに色のまさ

れば

人の家なりける菊の花を移し植えたりけるをよめる

づらゆき

280 咲きそめし屋戸しかはれば菊の花色さへにこそ移ろひに

けれ

268は「人の前栽に菊に結びつけて植えける歌」、280は「人の家

なりける菊の花を移し植えたりけるをよめる」というように類

似した状況で歌が詠まれており、かつ268は「根さへ枯れめや」、

280は「色さへにこそ」といずれも「さへ」という助詞を用いて対をなす。269は宇多天皇が在位中宮中で詠ませた歌であるのに対し、279は宇多天皇が退位した後出家して仁和寺に移り住んでから献上された歌である点で、詠まれた状況が対照的で対をなす。

268と271は歌の冒頭に「植ゑし」という表現を共有し、269は菊を「天つ星」と見立て、272は菊を波と見立てて対をなす。270と273はともに「露」の語を詠み込みつつ、菊の花による不老長寿を詠じて対応し、271が「花まちどほにありし菊」「あはむとや見し」と詠ずるのに対し、274は「花見つつ人まつときは」と詠じ、「待つ」「見る」という動詞を共有する。272が「吹上の浜の形に菊植ゑたりけるによめる」という詞書を持つのに対し、275は「大沢の池の形に菊植ゑたるをよめる」と類似した詞書を有し、かつ「花かあらぬか波の寄するか」「誰か植ゑけむ」と、いずれも疑問の形を取って対応し、273は「菊の露のまにいつか千年を我は経にけむ」、276は「花よりさきと知らぬわが身を」といづれも菊の花と人の寿命を対比して詠じ共通する。274は菊の花を「白妙の袖」と見立て、277は白菊の花を霜に見立てて対をなし、275が「ひともと」と思った菊が池の底にもう一本生えていると詠ずるのに対し、278は菊が一年に二度咲く花だと詠じて対応する。276が秋の菊の花の盛りを詠ずるのに対し、279は秋以降の移ろう菊の花を詠じて対をなし、277が今を盛りと咲く「白菊の花」を詠ずるのに対し、280は移ろった菊の花を詠じて対応する。また、273と275は歌の末尾に「けむ」という助動詞が置かれて対応する。

268から280までの歌群は、268と280、269と279、それに273と275が274を中心に左右対称に対応すると同時に、268から277までの歌群の歌がそれぞれ三首先の歌と対応することによって、274を中心に左右対称の対応関係を構成する。その関係を図で示すと、**図11**となる。

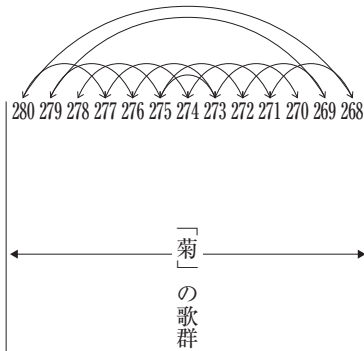


図 11

280から300の歌群を示してみよう。

人の家なりける菊の花を移し植ゑたりけるをよめる

つらゆき

280 咲きそめし屋戸しかはれば菊の花色さへにこそ移ろひに
けれ

題しらず

読人しらず

281 佐保山のははその紅葉散りぬべみ夜さへ見よと照らす月
影

宮仕へ久しうつかうまつらで山里にこもり侍りける

によめる

藤原関雄

282 奥山の岩垣紅葉散りぬべし照る日の光見る時なくて

題しらず

読人しらず

283 龍田川紅葉みだれて流るめりわたらば錦なかや絶えなむ
この歌は、ある人、「奈良の帝の御歌なり」とな

む申す

284 龍田川もみち葉ながる神奈備の三室の山に時雨降るらし

又は、「飛鳥河もみち葉ながる」

285 恋しくは見てもしのばむもみち葉を吹きな散らしそ山お
ろしの風

286 秋風にあへず散りぬるもみち葉のゆくへさだめぬ我ぞか
なしき

287 秋はきぬ紅葉は屋戸にふりしきぬ道ふみわけてとふ人は
なし

288 ふみわけてさらにやとはむもみち葉のふりかくしてし道
と見ながら

289 秋の月山辺さやかに照らせるは落つる紅葉のかずを見よ
とか

と

290 吹く風の色のちくきに見えつるは秋の木の葉の散ればな
りけり

せきを

291 霜のたて露のぬきこそ弱からし山の錦の織ればかつ散る

雲林院の木のかけにたたずみてよみける

僧正遍照

292 わび人のわきて立ち寄る木のもととは頼む蔭なく紅葉散り
けり

二条の後の春宮の御息所と申しける時に、御屏風に
龍田河に紅葉流れたる形をかけりけるを題にてよめ
る

そせい

293 もみち葉の流れてとまる水門には紅深き波や立つらむ
なりひらの朝臣

294 ちはやぶる神世もきかず龍田河韓紅に水くくるとは

是貞の親王の家の歌合の歌

としゆきの朝臣

295 わが来つる方も知られずくらぶ山木々の木の葉の散ると
まがふに

ただみね

296 神奈備の三室の山を秋ゆけば錦たちさる心地こそすれ
北山に紅葉折らむとてまかれりける時によめる

つらゆき

297 見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり
秋の歌

兼覧王

298 龍田姫手向くる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散る
らめ

小野といふ所に住み侍りける時、紅葉を見てよめる
つらゆき

299 秋の山紅葉をぬさと手向くれば住む我さへぞ旅心地する
神奈備の山を過ぎて龍田河をわたりける時に、紅葉
の流れけるを見てよめる
清原深養父

300 神奈備の山をすぎゆく秋なれば龍田河にぞぬさは手向く
る

280は詞書に「人の家なりける菊の花を移し植ゑたりけるをよめる」とあり、菊を移し植ゑた際の歌とされるのに対し、300は「神奈備の山」から「龍田川」に紅葉が移動したことを詠じて対をなす。281は「佐保山のははそのもみぢ散りぬべみ」と今にも散りそうな紅葉を詠ずるのに対し、299は「秋の山紅葉をぬさと手向くれば」と紅葉の散っている様を詠じて対応し、282と297はともに「奥山」の「紅葉」を詠じて対をなす。283は龍田川に紅葉の流れている様を錦と見立て、298は紅葉の散る様を龍田姫の手向けの幣と見立てて対応し、284と296は「神奈備の三室の山」の紅葉を詠じて共通する。

285から290までの六首は、285が「山おろしの風」に紅葉を散らさないよう懇願するのに対し、290は「吹く風」が木の葉を散らしている様を詠じて対応し、286と289は散っていく紅葉を見ている様を詠じて共通し、287と288は道に散り敷いた紅葉を詠じて対応するというように、287と288の対を中心に左右対称の構造を形成する。

290から295までの歌群も、290と295が「木の葉」の散る様を詠じて対応し、291が山で散る紅葉を錦と見立て、294が川に散る紅葉をくくり染めの布と見立てて対をなし、292が山ですっかり散ってしまった紅葉、293が散って河口口まで流れ着いた紅葉を詠じて対応する。290から295までの歌群も、292と293の対を中心に左右対称の構成を取る。

このように見てくると、280から300までの歌群は、280から284までの歌群と296から300までの歌群が、282と297、283と298の二組の対が交差しつつも、290を中心に同心円状に左右対称の形で対応し、285から290までの歌群は、287と288の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成し、290から295までの歌群は、292と293の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成する。その結果、285から295までの歌群は、290を中心に左右対称の対応関係を構成することになり、280から300までの歌群は、図12に示すように290を中心に左右対称の対応関係を構築する。

右に示した歌群の終わりから二首目299から冬の部の巻頭歌314までを示すと以下のようになる。

小野といふ所に住み侍りける時、紅葉を見てよめる
つらゆき

299 秋の山紅葉をぬさと手向くれば住む我さへぞ旅心地する
神奈備の山を過ぎて龍田河をわたりける時に、紅葉
の流れけるを見てよめる
清原深養父

300 神奈備の山をすぎゆく秋なれば龍田河にぞぬさは手向く
る

寛平御時後の宮の歌合の歌

藤原興風

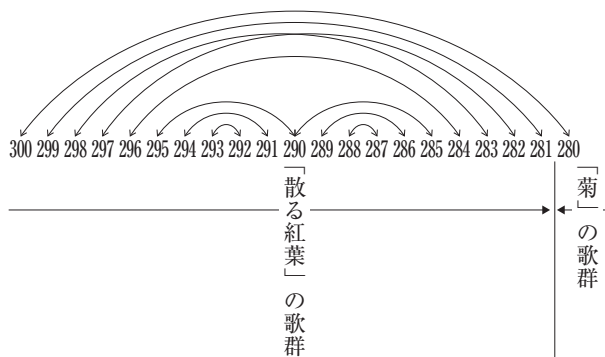


図 12

301 白波に秋の木の葉のうかべるを海人のながせる舟かどぞ
見る

龍田河のほとりにてよめる 坂上是則

302 もみぢ葉の流れざりせば龍田河水の秋をば誰か知らまし

志賀の山越えてよめる 春道列樹

303 山川に風のかけたる柵は流れもあへぬ紅葉なりけり

池のほとりにて紅葉の散るをよめる

みつね

304 風吹けば落つるもみぢ葉水きよみ散らぬかげさへ底に見
えつつ

亭子院の御屏風の絵に、川渡らむとする人の、紅葉
の散る木のもとに、馬をひかへて立てるをよませ給
ひければ、つかうまつりける

305 立ちとまり見てを渡らむもみぢ葉は雨と降るとも水はま
さらじ

是貞の親王の家の歌合の歌 ただみね

306 山田もる秋の飯庵に置く露は稲負鳥の涙なりけり

題しらず 読人しらず

307 穂にもいでぬ山田をもると藤衣稲葉の露にぬれぬ日はな
し

308 刈れる田におふるひつちの穂にいでぬは世をいまさらに
あきはてぬとか

北山に僧正遍照と茸がりにまかれりけるによめる

素性法師

309 もみぢ葉は袖にこきいれてもていでなむ秋は限りと見む

人のため

寛平御時、「古き歌奉れ」とおほせられければ、「龍田河もみぢ葉ながる」といふ歌を書きて、そのおなじ心をよめりける
おきかせ

310 山より落ちくる水の色見てぞ秋は限りと思ひ知りぬる
秋はつる心を龍田河に思ひやりてよめる
つらゆき

311 年ごとにみぢ葉流す龍田河水門や秋の泊まりなるらむ
長月の晦日の日、大堰にてよめる

312 夕月夜をぐらの山に鳴く鹿の声のうちにや秋は暮るらむ
おなじ晦日の日、よめる
みつね

313 道知らば尋ねもゆかむもみぢ葉をぬさと手向けて秋はいにけり
題しらず
読んしらず

314 龍田河錦織りかく神無月時雨の雨をたてぬきにして
299は秋の山が紅葉を幣と手向ける、313は秋が紅葉を幣と手向けると詠じて対をなし、300と314は龍田川に流れる紅葉を詠じて共通する。

また、300から305までの歌群の歌は、いずれも水に浮かぶ紅葉を詠じて、歌群を構成するそれぞれの歌が歌群中の他の全ての歌と対応する。

305と306は、305が「紅葉」を「雨」と見立て、306が「露」を「稲負鳥の涙」と見立てて共通し、306と307は「山田」を「もる」「露」という表現を共有し、307と308は「田」「稲」を詠じて対応する。

308は「あきはてぬ」に「飽き果てぬ」と「秋果てぬ」を掛け、それに続いて309が「秋は限りと見む人のため」、310が「秋は限りと思ひ知りぬる」、311が「水門や秋の泊まりなるらむ」、312が「鳴く鹿の声のうちにや秋は暮るらむ」、313が「もみぢ葉をぬさと手向けて秋はいにけり」といった歌が配列されるというように、308から313までの歌群は、秋の終わりを詠ずる歌が連続して配置され、それぞれの歌が歌群中の他の全ての歌と対応関係を形成する。このように見えてくると、299から314までの歌群は、**図13**のように306と307の対を中心に左右対称の構造をなす。

『古今集』秋の部下は、秋の部上の巻軸歌248から268までの歌群、268から280までの歌群、280から300までの歌群、299から冬の部の巻軸歌314までの歌群という四つの左右対称の対応関係を持つ歌群の連続によって構成される。『古今集』の巻軸歌からの連続は、248が268に、268が280に、280は300に、300は冬の部の巻軸歌314に対応するという形で、秋の部上の巻軸歌248から冬の部の巻軸歌314に至っている。

*

冬の部の歌群の構造分析に移ろう。先ず冬の部の冒頭に配置された314から323までの歌群を示してみよう。

題しらず

読んしらず

314 龍田河錦織りかく神無月時雨の雨をたてぬきにして
冬の歌とよめる
源宗于朝臣

315 山里は冬ざざびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば

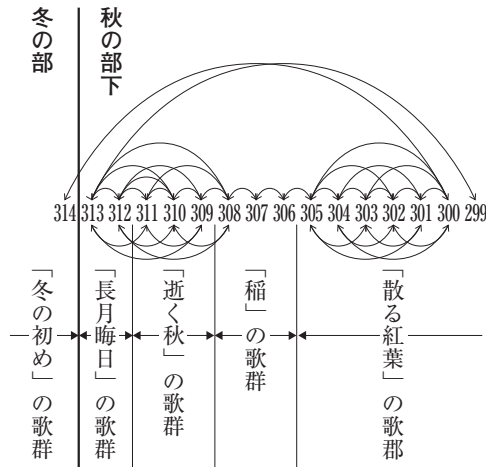


図 13

題しらず 読人しらず

316 大空の月の光し清ければ影見し水ぞまづこほりける

317 夕されば衣手寒しみよしのの吉野の山にみ雪降るらし

318 今よりはつぎて降らなむわがやどのすきおしなみ降れる白雪

319 降る雪はかつぞ消ぬらしあしひきの山のたぎつ瀬音まさるなり

320 この川にもみぢ葉流る奥山の雪消の水ぞいままさるらし

321 故里は吉野の山し近ければ一日もみ雪降らぬ日はなし

322 わが宿は雪降りしきて道もなし踏みわけてとふ人しなれば

冬の歌とよめる 紀貫之

323 雪降れば冬こもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きける

314 が紅葉を錦、雨を縦糸、横糸に見立てるのに対し、323 は雪を花と見立てて対応し、315 は冬になると山里は「人目も草もかれぬ」と詠じ、322 は雪が降り積もって道もなくなり「踏みわけてとふ人しなれば」と詠ずるといふように、いずれも冬になると人が訪ねてこない様を詠じて共通する。316 が「大空の月の光し清ければ」と詠ずるのに対し、321 は「故里は吉野の山し近ければ」とともに順接の確定条件の構文を取って共通し、317 「みよしのの吉野の山にみ雪降るらし」、320 が「奥山の雪消の水ぞいままさるらし」といずれも確実な根拠に基づいて推量する助動詞「らし」を用いて対をなし、318 が里に降り積もる雪を詠ずるのに対し、319 は山に降っている一方で消える雪を詠じて対を

なす。

また、314が時雨が降って川に錦が生ずると詠ずるのに対し、322は雪が降ってわが宿への道が埋もれたと詠じて対応し、315が「人目も草も」と表現するのに対し、323は「草も木も」と類似した表現を取って対応する。316と320は「水」を詠じて共通し、317と321は「吉野の山」に「み雪」が降る様を詠じて対応する。

さらに、317が吉野の山に降る雪を詠ずるのに対し、318は里に降る雪を詠じて対をなし、319は山の川で雪消の水が増さる様を詠ずるのに対し、320では里の川が雪消の水で増水している様を詠じて対応するとともに、317が山で雪の降る様を詠ずるのに対し、319は山で降る雪がその一方で消え、山川の水量が増える様を詠じて対をなし、318が薄を押し伏せて里に降る雪を詠ずるのに対し、320は里に流れる川の水に紅葉が浮かんでいることから、雪消の水で里の川の水高が増した様を詠じて対をなす。

314から323までの歌群は、318と319の対を中心と同心円状に左右対称の構造を形成すると同時に、314と322の対と315と323の対、316と320の対と317と321の対、317と319の対と318と320の対が交差して対応し、317と318、319と320がそれぞれ対をなして対応する。以上の対応関係を図示すると、**図14**となる。

次に322から330までの歌群を示してみよう。

(題しらず)

(読人しらず)

322わが宿は雪降りしきて道もなし踏みわけてとふ人しなれば

冬の歌としてよめる

紀貫之

323雪降れば冬こもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きけ

る

志賀の山越えてよめる

紀秋岑

324白雪の所もわかず降りしけばいはほにも咲く花とこそ見れ

奈良の京にまかれりける時に、宿れりける所にてよめる

坂上是則

325みよしの山の白雪つもるらし故里寒くなりまさるなり

寛平御時後の宮の歌合の歌 藤原興風

326浦ちかく降りくる雪は白波の末の松山越すかとぞ見る

壬生忠岑

327みよしの山の白雪踏みわけて入りにし人のおとづれもせぬ

328白雪の降りてつもれる山里は住む人さへや思ひ消ゆらむ

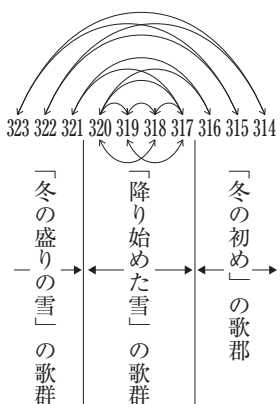


図 14

雪の降れるを見てよめる

凡河内躬恒

329 雪降りて人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思ひ消ゆ
らむ

雪の降りけるをよみける

清原深養父

330 冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやある
らむ

322 から 330 の歌群は、322 と 329 は雪が道に降り敷き人も訪ねてこない状況を詠じて共通し、323 と 330 は雪を花に見立て、ともに「春」という語を詠じて対応する。324 は「白雪の所もわかず降りしけば」、328 は「白雪の降りてつもれる山里は」といずれも白雪の降り積もる様を詠じて対応し、325 と 327 はともに「みよしの山の白雪」という表現で始まる点で共通する。

また、323 と 324 は「雪」を「花」に見立てて共通し、324 と 325 は、詞書から道中の雪を詠んでいる点で共通する。327 と 328 はいずれも「人」の語を詠み込んで対をなし、328 と 329 は「思ひ消ゆらむ」という表現を共有して対をなす。

322 から 330 の歌群は、323 と 324、324 と 325、327 と 328、328 と 329 が対をなすと同時に、322 と 329 の対と 323 と 330 の対が交差して対応し、324 と 328、325 と 327 が同心円状に対応するという形で、326 を中心に 15 のような左右対称の対応関係を構築する。

329 から 338 までの歌群は、以下の通りである。

雪の降れるを見てよめる

凡河内躬恒

329 雪降りて人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思ひ消ゆ
らむ

雪の降りけるをよみける

清原深養父

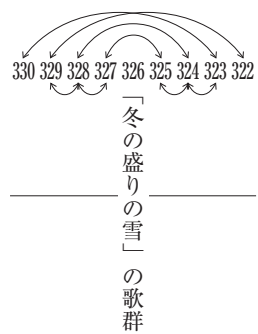


図 15

330 冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやある

らむ

雪の木に降りかかれりけるをよめる

つらゆき

331 冬こもり思ひかけぬを木の問より花と見るまで雪ぞ降りける

大和国にまかれりける時に、雪の降りけるを見てよめる
坂上是則

332 あさばらけ有明けの月と見るまでに吉野の里に降れる白

雪

333 消ぬがうへにまたも降りしけ春霞立ちなばみ雪まれにこそ見め
読人しらず

題しらず

334梅の花それとも見えず久方の天霧る雪のなべて降れば

この歌、ある人のいはく、柿本人麿が歌なり

梅の花に雪の降れるをよめる 小野篁朝臣

335花の色は雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人の知るべく

雪のうちの梅の花をよめる 紀貫之

336梅の香の降りおける雪にまがひせば誰かことごとわきて折らまし

雪の降りけるを見てよめる 紀友則

337雪降れば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし

ものへまかりにける人を待ちて、師走の晦日によめる

みる みつね

338わが待たぬ年は来ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

329から338までの歌群は、329の「雪降りて人もかよはぬ道なれや」という表現と338の「冬草のかれにし人はおとづれもせず」という表現が、ともに冬に通つて来ない人を詠じて対をなし、

330と337はいずれも雪を花に見立てて共通する。

331は「花と見るまで雪ぞ降りける」、332は「有明けの月と見るまでに吉野の里に降れる白雪」と、いずれも雪を花や月の光に見立て、「花と見るまで」、「月と見るまで」と類似した表現を用いて対をなし、330が「雲のあなたは春にやあるらむ」と予感するのに対し、333も「春霞立ちなばみ雪まれにこそ見め」と春を予想して対応する。333は春になったら雪が見られなくなる

と詠ずるのに対し、334は雪のせいで春の花である梅の花が見られないと対照的な内容を詠じて対をなす。335と336は、ともに「梅の香」を詠じて対をなし、334と337は、雪が降つて雪と梅の花の見分けが付かないと詠じて対応する。

以上のことから、329から338までの歌群は、333と334の対を中心に図16に示すような左右対称の構造を形成する。

338から342までの歌群を示してみよう。

ものへまかりにける人を待ちて、師走の晦日によめる
みる みつね

338わが待たぬ年は来ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず
年のはてによめる
在元元方

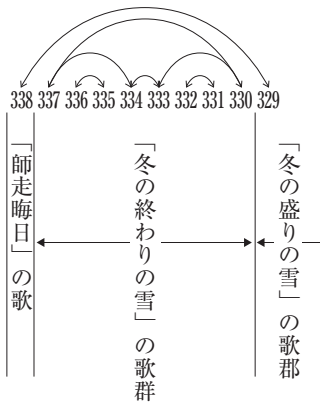


図 16

339 あらたまの年のをはりになるごとし雪もわが身もふりま
さりつつ

寛平御時後の宮の歌合の歌 読人しらず

340 雪降りて年の暮れぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見え
けれ

年のはてによめる 春道列樹

341 昨日といひ今日と暮らしてあすか河流れてはやき月日な
りけり

「歌奉れ」とおほせられし時に、よみて奉れる

紀貫之

342 行く年の惜しくもあるかな真澄鏡見る影さへにくれぬと
思へば

338 から342 までの歌群は、338 が「わが待たぬ年は来ぬれど」と詠
ずるのに対し、342 は「行く年の惜しくもあるかな」と対照的な
感懐を詠じ、かつ338 は「冬草のかれにし人」、342 は「見る影さ
へにくれぬと思へば」と、ともに掛詞を用いて対応し、339 と341
は「年のはてによめる」という同一の詞書を持ち、339 が「雪も
わが身もふりまさりつつ」と「降り」と「古り」の掛詞を用い
て、「雪」も「わが身」も「ふりまさ」と詠ずるのに対し、
341 は「月日」と「あすか河」の流れがともに速いと詠じて対を
なす。338 から342 までの歌群は、340 を中心に左右対称の対応関係
を形成する。338 から342 までの歌群の対応関係を図示すると、図
17 となる。

『古今集』冬の部は、冬の部の巻頭歌314 から323 までの歌群、
322 から330 までの歌群、329 から338 までの歌群、338 から冬の部の巻

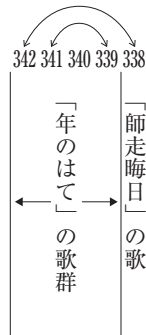


図 17

軸歌342までの歌群という四つの左右対称構造を持つ連続した歌
群によって構成される。『古今集』の巻頭歌との連続は、冬の
部の巻頭歌314が322に対応し、322が329、329が338と対応し、338が342
と対応する形で、冬の部の巻軸歌まで続いている。

なお、339が「雪も我が身もふりまさりつつ」と詠ずるのに対
し、342も「年」と「真澄鏡見る影」が「くれる」と同様な内容
を詠じて対応し、340が「つひにもみぢぬ松も見えけれ」と常に
変わらない事物を詠ずるのに対し、341は「流れてはやき月日な
りけり」と移ろいゆく物を詠じて対をなすと見ることもできる。
この場合、338は「わが待たぬ年は来ぬれど」と「年」を詠じ、
「年のうちに春は来にけり」と詠じる春の部上の巻頭歌と「年」
の語を共有し、かつ「年は来ぬれど」、「春は来にけり」と類似
した表現を取って対応する。とすると、338から1までの歌群は、
図18のように340と341の対を中心に左右対称の対応構造を形成す
ることになる。

このように四季の部の末尾の歌群が四季の部の巻頭歌と対応

して、左右対称の対応関係を形成するということは、四季の部の冒頭から末尾までが、左右対称の対応関係で連続して結ばれていること意味し、一年が連続して推移しつつ循環している様を示す配列となっていると解釈することができよう。



図 18

注1 『古今集』の本文は、『新編日本古典文学全集』に拠る。

2 拙稿「『古今集』春の部下の構造―左右対称の対応関係という観点からの分析―」（『国文白百合』49号、平成30年3月）

（本学教授）